

Ⅱ 高校日本史における主題学習について

織 田 長 繁

《はじめに》

われわれの研究目標は社会科における教科構造の諸問題であるが、それが完成したり完成に近づいたりしたわけではなく、今後も継続して進められるべきものである。しかしこれと同時に、教科構造論の進行に伴って方法論を思考し、思考された方法論の実践があることは当然の順序である。

48年度から実施される改訂指導要領には、新しい内容として日本史における「主題学習」が提起されている。現行指導要領の世界史には主題学習が述べられているが、そのねらいや扱いは漠として捕え難いものである。改訂指導要領日本史の主題学習についてはこれらの点がやや明らかにされてきたので、構造論と並行しながら方法論の実践の形で、主題学習を取上げることとした。しかしながら私の扱った主題学習の実践は現在進行中であるので、ここに記すのはその中間報告の域を出ないものであることを、御承知願いたい。

《主題学習のねらいと実験》

改訂指導要領には、主題学習の観点について3つの例示すなわち(1)人物と時代的背景の関連、(2)文化摂取・文化的創造の総合的学習、(3)生活発展がある。また「改訂高等学校学習指導要領の展開」社会科編(明治図書)には、「主題意識」を「問題意識」にかえてもよいとする記述がある。これは主題学習そのものではないにしても、そのねらいとする点を明白にしたものとして、十分考えるべき点であろう。この意味からまず問題意識を重んじ育成する立場から入った実験を今年度において試み、実験によって得た結果に検討と批判を加えて深めていくことにした。本校における日本史は2年3年の2学年にわたり2単位ずつ計4単位で実施することになっているので、今年度において2年生に主題学習的方法を実施することにした。

本年度実施しているのは実験である。このため2年生3クラスの内、1クラスに実施し、他の2クラスは系統学習的な方法を取り、その結果について両者の比較を行ない、来年度においては次の段階に進むつもりである。実験クラスについては終始主題的学習方法を続けるのが妥当であると思うが、第2学期末以降主題的な扱いが行ない易い教材をなるべく多く取上げるよ

うに努めている。

現在までに取上げたねらい、内容、順序は大体次の通りである。(1月中旬現在)

1. 鎌倉幕府の職制

ア、頼朝がおかれた位置・状態の確認—全国的支配の段階でなかったことを理解させる

イ、侍所開設の意味

a 頼朝挙兵以後におけるその動向を概観する

b 概観の中で御家人統制の必要性をとらえさせる

→侍所を最初に開設した背景を理解させる

→侍所の職務をとらえさせる

ウ、公文所・問注所の設置

(イと同様な方法で進める)

エ、京都守護等中央以外の諸機関

(イと同様な立場で、特にその背景を明らかにする)

オ、守護・地頭の設置

a 頼朝の支配し得た範囲—京都側との関係から説明する

b 守護・地頭設置の背景と必要性とその実施のいきさつ

c 守護・地頭の任命、職務、得点を比較する

d 京都側の反対が生じた理由をb・cとの関連から理解させる

e 反対に対して頼朝のとった処置

f 守護・地頭設置によって生じた問題点とその意味付け

○全国支配を実質的に行ない得たことへの理解

○守護と地頭との間に生じた支配的關係

○当代に見られる2面性(国司と守護、荘官と地頭)

これらの扱いは系統学習をとった場合にも用いられる内容と順序ではあるけれども、頼朝が置かれた立場やあり方を京都、平氏側または義経との関係から確認し、その状態の中で頼朝の立場に立って理解(説明と質問応答を含む)させまとめたもので、年代の進行によって生じた問題点の扱いは、質問によって問題点の所在を明らかにした上で、その意味付けを説明したものである。

2. 執権政治の成立

ア、執権政治の簡単な説明とその必要性の考察

- イ、執権政治の成立推進・維持への対策—原則的に扱い、具体的には扱わない
- a 機会を見てまたは作って権力掌握につとめること
 - b 推進し維持し発展させるための諸機関の必要性
 - c 体制維持発展のための理論的思想的根拠の作成
- ウ、成立とその過程
- a 頼家が持つ権力を制限
 - b 源氏に対する政策
 - 頼家、実朝への処置
 - 源家滅亡後の將軍職の扱い方
 - c 頼朝遺臣の討滅と死亡
 - 梶原、比企、畠山、和田の諸氏への対策
 - 北条政子、大江広元の死去とその意味付け
 - d 諸機関の設置
 - 連署、評定衆、引付衆の職務
 - 諸機関設置の年代確認を通して、特に評定衆にあってはcとの関連を、引付衆にあっては時代の性格が変化してきていることに触れておく
 - e 理論的思想的根拠の作成
 - 御成敗式目制定のねらい—倫理的側面からも扱う
 - 主な内容
 - 背景

執権政治の前に承久の乱を取上げたが、この扱いは京都側の立場を中心として乱が生じた背景を考察し、北条氏の行動については簡単に触れておく程度に止めた。執権政治については頼家が権力を制限されて以後における北条氏の動向を一連のものとしてまとめ、また具体的事実に入る前に執権政治体制そのものの説明と成立発展への手続き・対策・諸機関・思想的倫理性の成立の必要性を質問によって誘き概念としてまず押えておき、次の段階で年表・史料によってウの内容に入った。この2段階の方法は具体的事実だけにとらわれず、むしろ問題の所在を明確にしておく必要を感じたからである。史実の整理を通じて問題の所在をまとめていく方向も考えられるが、何れにしても問題の

所在換言すれば問題意識を確認させることは大切な要件と思う。なお、具体的事実については主に教科書を利用してまとめる方法を取り、詳細な説明は省略したことが多い。

1, 2を通じいえることは、かかる扱い方が果して主題学習の名に値するか否かの基本的な疑問である。このような扱いは系統学習の中でも用いられるとは思いますが、前述した如く主題意識を問題意識といいかえる立場から出発しているので、幕府職制にあっては頼朝を中心とした立場から、執権政治にあっては北条氏を中心とした立場からそれぞれ問題の所在を確めながら展開したもので、必ずしも時代的年代的推移には従っていない。この点において系統学習とは若干異った扱いとなってきたわけである。

《今後のあり方》

このような扱いをした結果については、進行中の段階であるため、成果を得ていない。実験の後にテスト、感想文などによって成果をとらえることは一般に行なわれる方法ではあるが、しばらくこの様な扱いを継続してその定着性を見るつもりである。期末テストの中で検討したい点は、時代の特色をどの程度捕えているか、取上げた内容の位置付けとその意味をどの程度把握しているか、またその定着度かどうか、細かな内容をどの程度理解しているかの3点である。

この結果について系統学習を実施しているクラスのそれと比較し総合して、次年度において問題を深めていく方針である。どのような問題を捕えることができるかはテストの結果によるが、今後の予定としては2年生を対象とし、系統学習と主題学習の方法と両者を併用した学習の3方法をそれぞれのクラスに実施して比較することになっている。取上げる教材は目下検討中であるが、聖徳太子から大化改新とそれに続く時代で年代的に言えば6世紀末から8世紀初頭にかけての変動期の中の問題か、または古代における文化の問題の何れかについて、実験の結果を生かしながら問題を探り深めていきたいと思っている。